

ヨコ転者にとつての「最後の抛りどころ」

林 紘一郎 (各務原市出身)



私は、蘇原小学校、那加中学校を経て、昭和34年に岐阜高校を卒業しました。その後東京の大学に入学して以来、仙台・札幌などでの勤務はありましたが、残念ながら岐阜との縁はなく、数年前に、90歳を過ぎた母を近くと呼び寄せたことから、遂に各務ヶ原の拠点もなくなりました。

拠点が定かでないことは、私の職歴にも言えます。電電公社→NTTを通じて33年も勤めたという点では、本籍はハッキリしていますが、その間7年程は技術部門に属し、国際畑もニューヨーク勤務を含めて7年程になるなど、「専門不明」です。加えて97年に学者に転向してから、14年が経つことになっています。

「タテ社会」の日本では、先輩と後輩などの上下関係が大切です。企業にとどまらず、どの組織でも、

タテの系列に長くいることに意味があります。年金もタテ型になっており、私も大いにタテ社会の利点を享受しています。

黙ってタテ社会のメリットだけを頂戴していれば良いものを、ついつい色気を出して、ヨコ展開してしまいました。最初の切掛けは、30歳を過ぎてまもなく本を書き、社外にアピールしてしまつたことです。さすがに、この時は「若過ぎる」ことを自覚して、その後の10年程はひたすら社業に専念する模範社員として過ごしました。

しかし、「ヨコ志向」のDNAを抑えることが出来ず、再び本を出し、50歳の時にはついに博士号まで戴いてしまいました。こうなると、どんどん「ヨコ」への繋がりが増殖し、審議会の委員、大学の非常勤講師、その頃「はやり」だった異業種交流会のメンバーなど、またとない経験をさせて貰いました。

フツの会社員の方なら、これが如何に危険な行動であるかは直ぐお分かりになると思います。会社にとつて目障りな人は、「早期退職」を勧奨されるのがオチで、「タテ」における

利点は殆んどありません。遂に私も、「身から出た錆」(あるいは「出藍の誉れ」?)で、学者という別の道へ「ヨコ転」することになりました。

さて、人間歳を取ると昔が懐かしくなり、同窓会への出席率が高まります。大卒なら大学のクラス会が主で、高校のクラス会がその次に来るでしょう。タテ社会を生きた方々にとつては、それぞれは1つが原則です。ところがヨコ転者にとつては、複数の場合もあるのです。

私の母校は、卒業した東京大学(法学部)のほか、博士号を戴いた京都大学と慶応義塾大学、10年間も非常勤講師を勤めた早稲田大学や、初め

て講義の経験をさせて戴いた一橋大学など、それぞれに思い出があつて、すべて「母校」です。

しかし、それはヨコ転者の片思いに過ぎず、タテ社会の厳格な規律には合いません。特に、私の博士号は両方とも論文博士で、大学院には通つたことがないため、私の想いがいくら強くても、先方には受け入れられません。例えば、ニューヨークで現地の京大同窓会に入れて貰おうとしたら、面接(?)があつて見事に落選してしまいました。設問は、すべて京都の地名の読み方だったので、口頭試問で大学に顔を出した以外は、まったく土地勘のない私ですから、落選も当然です。

そつなると私の関心は、自然に高校の同窓会に向かいます。幸い岐阜高校の在京同級生は団結が固く、また労を惜しまないH君という名幹事に恵まれ、会合も盛んで、加えてM女史が在京同窓会の会長を務めているので、こつちらの会合でも毎回楽しい思いをしています。

ヨコ転者の最後の抛りどころは、やはり青春時代を過ごした郷里の同窓会といつことになるでしょう。

林 紘一郎 (はやしこういちろう)

《略歴》

東大卒、NTTアメリカ社長、経済学博士、法学博士、大学講師・教授等を経て、現在情報セキュリティ大学院大学学長。

